

情動論的転回をめぐる学際研究:情動の思想史を踏まえた 〈帝国〉の情動装置の系譜学

The “Affective Turn” in the humanities and social sciences : a genealogical study of imperial affective apparatuses

水嶋 一憲 (MIZUSHIMA Kazunori)

21世紀に入り、グローバル化の加速度的な進行の中で政治・経済・文化の領域が複雑に絡まり合いながら、それぞれドラスティックな変容を遂げつつある今日、人文・社会諸科学における「情動論的転回」に大きな注目と関心が寄せられている。情動に焦点を合わせるこのアプローチは、近年唱えられた他の「転回」(言語論的転回や文化論的転回、等々)と同じく、諸種の学問領域で試行されてきた生産的な研究の動きを整理・活性化した上で、今後の探究のための新たな道筋を開こうとするものである。と同時に、情動論的転回は——以前の言語論的転回や文化論的転回とは異なり——、触発し・触発される身体とその情動の諸相に照準することをとおして、従来の社会理論や権力理論のパラダイム転換、またひいては21世紀のグローバル社会における身体・テクノロジー・事物の新たな布置の解明を目指すものである。本研究は、かかる情動論的転回がもつ意義を社会哲学・社会思想的観点から考察するとともに、現在のグローバル資本主義の動向と動態の中で情動が果たすきわめて重要な働きを学際的観点から把握することをその目的とする。情動論的転回をめぐる学際研究に取り組むさいに、出発点として問わなければならないのは、そもそも情動とは何か、という基礎的な問いであろう。マイケル・ハートは、最近出版された学際的共同研究『情動論的転回』に寄せた序文で、「情動の理論を最大限に推進した哲学者」としてバルフ・デ・スピノザの名前を挙げ、またスピノザの思考が、「この分野の最新の研究のほとんどにとっての直接的ないし間接的なよりどころ」となっている点を指摘している。

こうした視座をさらに掘り下げて検討するために、エティエンヌ・バリバルによる画期的なスピノザ論を単独で翻訳し、さらに解説「マルチチュードの力能と恐れ」を付して、『スピノザと政治』水嶋一憲訳・解説、水声社、2011年として出版した。

さらに関連書として、クリスティアン・マラッツィの著書『資本と言語』を翻訳・監修し、詳細な解説「追伸——〈金融〉と〈生〉について」を付して出版した(クリスティアン・マラッツィ『資本と言語』、柱本訳・水嶋監修・解説、人文書院、2010年)。これは、金融経済とポストフォーディズムの労働、現代世界において支配的となった価値生産の新たな形態を言語行為論から析出する、革新的な社会経済理論の書である。

また、情動論的転回と帝国論の新展開の交点を探る論文、『情動の帝国——探究のためのノート』、JunCture 超域的日本文化研究、第2号、名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター、2011年、24-35頁、を公表した。

さらに関連論文として以下の論文と共著を刊行した。

「金融コミュニケーション資本主義からコモンのエコロジーへ」(現代思想、39巻3号、青土社、2011年、86-101頁)。これは、グローバル金融資本主義とコミュニケーション資本主義の連関を解析し、それらが現代社会に及ぼす影響を多面的に検討することを通じ、現在の資本主義の核心部に据えられている、コモンの生産とその収奪に抗するために、環境・社会・人間的主体性に同時に関わる〈コモンのエコロジー〉の構想を展望したものである。

「〈帝国〉とマルチチュード」、『社会学ベーシック第9巻 政治・権力・公共性』(世界思想社) (全280ページ)第14章(pp. 135-144)、2011年。これは、〈帝国〉の情動装置の系譜学をコンパクトに分析したものである。

また、学会発表や招待講演等、以下の研究報告を行った。

2010年1月：国際シンポジウム「反乱する若者たち」における基調講演「西川長夫が語るパリ五月革命」へのコメント(後に報告書に掲載)、水嶋一憲、名古屋大学大学院文学研究科プロジェクト主催(於：名古屋大学)。招待報告。

2010年3月：「マルチチュードとコモン：スピノザからグーグルまで」、水嶋一憲、早稲田大学交際哲学研究所主催。招待講演。

2010年3月：「ネットワーク文化の政治経済学」、水嶋一憲、国際シンポジウム「日中韓の政策協調とアジア共同体への対応：経済発展・環境問題・メディアの役割を中心に」(於：中国 青海省行政学院)、大阪産業大学アジア共同体研究センター、青海省行政学院、中共中央党校国際戦略研究所共催。

2010年11月：「生政治とコモン：サークル・ファクトリー・ドミューン」、水嶋一憲、第30回大会シンポジウム「身体と機械のあいだ：前衛運動と共同体」(於：名古屋大学)、日本比較文学会中部支部主催。学会発表／招待報告。

上記のように、情動論的転回をめぐるこの学際的研究は、〈帝国〉の情動装置の学際的分析という独創的な方法論を採用しながら、諸種の著書や論文の刊行、招待講演／研究報告／学会発表、翻訳書の出版といった多様な成果をもたらすことを通じて、当初の研究目的を達成することができたものと考えられる。